

## キャリア研究をはじめ－「一般化可能性」について－

今回は、私が大学院で学んでいた時に先輩から質問された「これって一般化できるの？」について書きたいと思います。

一般化可能性とは「研究結果を得た当初の集団以外のグループや環境に、その結果をどの程度適用できるか」ということです。量的研究を計画する場合、得られた結果がさらに幅広い集団に一般化できるようにサンプリング（標本抽出）する必要があります。研究計画の段階で、自分がターゲットとする母集団の範囲はどこなのか、サンプリングに偏りがいないか、サンプル数は十分かなどを検討する必要があります。そして、得られた結果についても、どのような対象に一般化できるかについて討論することが必要です。論文の最後に、「本研究の課題」「本研究の限界」として記述されている部分であり、この研究で得られた結果・知見はどの対象まで適用できるものか、一般化の対象を広げるためには今後どのような調査が必要かについて記述されています。

私が修士論文で取り組んだ研究対象は「経験年数 5 年未満の看護職者」でした。私の研究では、看護学生時代の状況も調査すること、出産・育児などのライフイベントの影響をあまり受けていないなどの基準から「経験年数 5 年未満」と区切りました。そして、一施設に勤務する看護職者だけではなく、複数の施設から研究協力者を選ぶことで施設による偏りを排除しました。得られた研究結果からは、経験年数が増すと異なる結果となることが示唆され、このことからこの研究で得られた結果は「経験年数 5 年未満の看護職者」に限られた対象での知見といえるでしょう。自分の知りたいこと（だけ）を明らかにするのではなく、自分が明らかにしようと思っていることはどの範囲のことなのか、サンプリングに問題はないか、得られた結果は同じような集団に適用できるものとなるのか（どの程度一般化できるのか）について検討することが、研究としての要件の一つだと感じています。

一般化可能性ということでは、もう一つ、事例研究のことについて考えたことがあります。「一事例の実験デザイン－ケーススタディの基本と応用」<sup>1)</sup>を大学院の授業で読みました。この時に、「事例研究も積み重ねれば一般化できる知見を得られるのではないか」と思ったことを今でも覚えています。現場では、

指導が困難な学生の事例など、このような時にどうしたらいいのか、なぜこのようなことになっているのかと悩むことが多くあります。このような問題を量的に調査することは難しく、質的な事例研究としての積み重ねが必要だと感じます。同じような対象、状況における事例研究を積み重ねることによって共通する知見が得られれば、類似した状況にある対象者への教育的関りの参考になるのではないのでしょうか。渡部先生も相談事例についてお書きになっていますが、量的研究だけが研究ではなく、現場において実践されている方々の実践事例について研究発表していただくことも必要だと思います。1人がコツコツと事例を積み重ねるには多くの時間を要しますが、研究発表の場で類似した事例に出合えば一時に複数の事例について討論することができます。

研究をはじめると思うと非常に難しく考えてしまいがちですが、自分の関心のあること、疑問に思っていること、どうにかしたいと思っていることをそのままにせず、どのように明らかにするか、どのように解決していくかと取り組むことが、研究への最初の一步ではないのでしょうか。

- 1) Barlow, D. H. & Hersen, M. 1984 *Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change*. 2nd ed. New York: Pergamon Press. (D. H. バーロー, M. ハーセン 高木俊一郎, 佐久間徹 監訳 1993 一事例の実験デザインーケーススタディの基本と応用ー 二瓶社)

(岩手保健医療大学 竹本由香里)